

魔法は論理に負けちゃうけども

月岡 誠 — 編集者/ライター

『死のロングウォーク』 スティーブン・キング 著 沢尻素子 訳



14歳から16歳からの少年100人がひたすら歩き、最後まで残った者1人だけに望みのままの報償が与えられる。残るといっても、普通の競争ではなく、他は全員死亡——一定速度以下になると監視兵から警告、警告4回目には射殺。レースから逃げてでも棄権しても射殺——シビアな生き残りレースです。

参加者の動機はさまざまですが、だいたい人生ちょっとうまくいっていない、あるいはもう少し幸せになりたい、なんて感じで、大きな目的を持っているのはいません。普通の少年たちです。だから、後半、疲労で少年たちがボロボロになっていく（疲労や痛みの描写がすごい）につれ、「なんで参加したのかももうわからん」的な独白や説明がやたらに記されます。優勝者以外はみんな死んじゃうのに参加を申し込むなんて普通じゃない、とも思いますが、抽選倍率はものすごく高いし、戦争行くのに「自分だけは死なない」と思うのと同じで、死は若者には実感できない（60歳間近のワタシでもなかなかね）。

ベトナム戦争に行った米兵の多くが黒人や貧困層だった、というのを何となく連想させる話ですし、「競争がいいものを生む」とかいったって、突き詰めればこういうことでしょ、という身もフタもない寓話にも読めます。少佐という、レースを主催する独裁者じみた人が出てきますが、詳しい描写はされないのも、軍国的独裁者がいるからこんなひどいレースが、じゃなくて、資本主義がはっきりすると独裁者、という風にしたかったからかと。

でも、まあそういうのはどうでもいいんです。いろいろな少年たちが出てきます。そして、こういうレースとわかってても、友情を育み、他人（＝ライバル）を助けたりする。射殺されそうな少年ハークネスが最後の頑張りを見せた時にほっとする主人公ギャラティの描写。

「こんなふうを感じるのは馬鹿らしいのだ。ハークネスが歩くのを早くやめれば、それだけ早く、彼（主人公）も歩くのをやめられる。単純な真理だ。それが論理だ。しかしもっと深いものがある。もっと真理に近い、もっと怖い論理がある。ハークネスはギャラティもその一員となったグループの一人、親戚同然なのだ。ギャラティが属している魔法の輪の一部。この輪の一部が壊れれば、他の部分もがたがたになってしまう」

仲間がいることは、競争に勝つ論理より深い“魔法”なんですね。何度か助けてもらったマクヴリーズ（これがいい奴なんだ）が座り込んだ場面で、「だめだ、だめだ」と叫び、監視兵に「俺を撃て」という主人公は、映画「ディアハンター」のデ・ニーロのよう。そして最後は……

もうひとつ、このレースがイベント化してて、沿道には無責任な見物客がいっぱいというのも、戦争映画好きな私にはなんかこたえる感じでした。🍵